

ジャイナ教の不殺生の原則とエコロジー

S・L・ガンジー

前川健一 訳

※本稿は2012年11月30日、東洋哲学研究所で行われたセミナーでの講演をまとめたものです。

一、崩壊しつつあるエコシステムと人類

現在の世界周期における最初のジャイナ教のティールタンカラ（勝利者、または開道者）であるリシャバデーヴァ尊者は数千年前に生まれたと信じられている。ジャイナ教の基本的要素である不殺生（アヒンサー）は、その時以来、人口に膾炙しているが、それが最高潮に

達したのは、二十世紀におけるガンジー（ガーンディー）の登場によってである。彼は不殺生を武器として使いこなし、イギリス人に「インドから去れ」と迫り、インドを完全に解放したのである。

地球という惑星のエコシステムは崩壊しつつあり、急速に環境は悪化している。そのため、全世界の心ある市民は、近年、ふたたびジャイナ教の非暴力の伝統と不殺生の原則に関心を寄せている。私は、以下の文で、生命の死滅を迫る現在の危機に対応する形でジャ

イナ教の不殺生の原則を規定し、分析し、それを明確にしようと思う。それに先だって、自然に対する人間の邪悪な態度と残酷さ、それに人間の無制限なライフスタイルによって促進されている、危機的な状況について、私がどう感じ、どのような検討を加えているか、述べておくのが適當だろう。この人間の邪悪さやライフスタイルは、この惑星の全資源を独占し、富を蓄積し、自分の生活を最も快適にするため、それを用いるという、全くの尊大さ・醜い自己顕示欲に根ざしている。こうした人間の傾向性によって、かつてなかった科学的・工業的・技術的進歩がもたらされた。それは少数の人間に繁栄をもたらしたものの、あらゆる生命形態を維持している自然の破壊に引き続き、数十億もの人々を飢餓線上に追いやり、みじめな状況に追い込んだのである。それは同時に、人類の生存にとって死活的に重要な多くの生物種の絶滅をもたらしたのである。

この惑星上の、生物学的に多様な生命形態は、絶滅の危機にさらされている。あらゆる生命形態は、相互に依存しており、相互に関連している。ジャイナ教の

系譜における第二四代のティールタンカラであるマハーヴィーラ尊師は、二千五百年前に「*parasparagrāho jīvanam*」と述べている。これは「全ての生命は、相互の協働と支援によって結び付けられている」という意味である。しかし、万物の霊長である人間は、一線を超えてしまい、動物や鳥類・森林・山岳・河流といったものに不利益をもたらしている。

同じような技術的段階の中で進化してきた諸文明は、福利の向上を目指している。文明は、しばしば、幻想的な力の感覚をもたらし、自然からの分離を引き起こす。そして、持続的な実践の中に埋め込まれていた基本的な価値を浸食するのである。さらに言えば、人間の文化の最古の形態は今も我々の身近にある。たとえば、遊牧民や農民は、近代生活を送る巨大都市の傍らで、生き延びているのである。巨大文明が失敗を繰り返してきたのに対して、こうした単純な技術は生き残っている。戦争や飢餓・環境破壊が襲ってきた時になつてはじめて、私たちはあまりに遅まきながら、自分たちが自然と平和に依存していること、つまりはエコ

ロジが命じていることを理解するのである。有名な科学者であるジェームズ・ラヴロックは、地球という惑星が深く病んでいると考えている。彼は、地球上の生物は、相互依存的な生物種と過去の生物の痕跡が織りなす網状組織のただ中で生きている単一の自律的な有機体であると見なしている。自然を征服しようとしても、私たち自身を打ち負かすことにしかならない。この真理を認識することが、この惑星の上で生き残るためには基本となる。ジェームズ・ラヴロックは、この自律的な有機体という存在を、古代ギリシアの大地の女神の名を借りて、「ガイア」と名付けた。もう一人、現代の有名な科学者を引き合いに出せば、フリッツォフ・カプラは、著書『ターニング・ポイント』で次のように述べている。

われわれ西洋文明は過去のどんな文化、どんな文明よりも環境に手を加えてきたため、われわれは生物学的、エコロジ的基盤とすっかり手を切るものになってしまった。この分離は、知力、科学

的知識、テクノロジーの発展と、知慧、精神性、倫理の間の驚くべきアンバランスにはつきりあらわれている。(吉福他訳¹⁾)

今日の私たちをとらえる生態学的な環境危機は、我々が自ら作り出したものである。我々は、日々の振舞いの中で、不殺生の原則を無視している。人間と人間以外のものが結ぶ関係の網状組織が壊れたのは、人間以外のものに対する我々の振舞いがあまりにも暴力的であつたからに他ならない。

不殺生というジャイナ教の原則は、エコロジ的な倫理である。他の四つのジャイナ教の原則、すなわち、盗まない、真実を語る、無所有(アパリグラハ)、性的禁欲(梵行、ブラフマチャリヤ)も等しく重要ではあるが、それらは多かれ少なかれ専ら不殺生の原則だけを強化するために存在しているのである。

不殺生は、人間の文明・文化の発展の極点である。暴力(ヒンサー)は、人間生活に分離不可能なほど絡みついているが、人間生活の発展の一部とは考えられて

情欲にかられて命を奪うことが暴力（ヒンサー）である。⁽³⁾

いない。二回にわたる原子爆弾による大量虐殺の後、現在では、人類が生き残るために不殺生が重要であると悟る世界の人はますます増えている。原子爆弾は、20世紀の四十年代に二十万人の生命を奪い、この地球のいたるところを点々とおおっている民族的・宗教的・政治的な戦争・紛争という形態の暴力の、未曾有の高まりであった。人類は、駆け足で、混沌と無政府状態に陥るように見える災厄へと向かっている。

二、暴力の定義とその原因

暴力の原因を分析するに先だって、まず私たちが「暴力」という言葉で意味しているものについて理解してみたい。普遍的に暴力の形態として理解されている物理的暴力の様々な例は、説明するに及ばない。というのも、そうした例は、暴力の一つの面を描き出しているにすぎないからである。著名なジャイナ教の学者であるウマースヴァーティは、『真理証得経』の中で、次のように暴力を定義している。

情欲という中には、怒り・高慢・欺瞞といった強力な情念が含まれる。情欲に動機づけられて生命に危害を加えることが暴力であると言い換えてもよいであろう。もし熟慮した意図なしで危害を加えた場合、それはそれ自体としては悪行とはならない。何故なら、それは執着や憎悪といった感情をとまなっていないからである。社会的存在として、私たちはその全体性において暴力を免れることはありえない。それ故、ジャイナ教の聖典は、在家信者（シュラヴァカ）に対し、少なくとも不必要な暴力を避け、アヌヴラタ（基本的な誓い、小誓戒）を守るよう勧めるのである。我々が今日の社会で見る暴力行為は、憎悪・所有欲・嫉妬・肉欲といった濃密な感情から生じている。暴力は最初に思考の中に生じ、口頭に、つまり言葉として、溢れだす。激情が制御できないまま高まる時、それは恐ろしい物理的暴力に進んでいく。ここで、それが水や空気・植

物・野菜の野放図な使用であろうと、人間の無制限な貪欲を満足させるための森林の無制限な破壊であろうと、その源は人間の心である。人類に迫る暴力の潮流を深く懸念していた、前国連事務次長でありコスタリカ平和大学の名誉総長であるロバート・ミュラーは、今日の世界におけるあらゆる形態の暴力、すなわち物理的暴力、言論の暴力、視覚的暴力、心理的暴力といったものに対処するため、国連は世界首脳から成る委員会を任命すべきだとの考えを示している。それが対処すべきものには以下のようなものが含まれる。すなわち、子どもに対する暴力、家族間の暴力、共同体の中の暴力、街角での暴力、宗教間の暴力、国際関係での暴力、地球上のあらゆる集団の間の暴力、さらには、我々の兄弟姉妹である動物への暴力、今この瞬間に世界にはびこる暴力といったものである。白衣派ジャイナ教のテラパンティー派の教主である故アーチャーリヤ・マハーブラギヤ猊下は、次のように述べている。

暴力と非暴力はどちらも我々に内在している。我々

の心は同時に二つの仕方では働いている。一方は、怒りを命じる。他方は、忍耐を勧め、怒りに待ったをかける。煽動的傾向と抑制的傾向の両方が存在する。善と悪がどちらも我々の中に実在する。真の問題は、次のことである。我々は二つのうちのどちらを発展させるべきなのか。我々はどちらを目覚めさせるべきであり、どちらを眠りに就かせるべきなのか。

彼はさらに次のように述べている。社会に蔓延する暴力は、精神的な非暴力を発展させない限り、終わらせることはできない。そのような非暴力は、全ての魂、すなわちこの地球上のあらゆる生き物の魂が単一であり平等であることに基づいている」と。

三、諸信仰における不殺生（非暴力）

全世界のあらゆる宗教的伝統は、我々が生き延びる基盤となりうるのは不殺生だけであるということに合意している。仏典である『ダンマパダ（法句経）』の中

には、次のように説かれている。「生きものを殺すこと

なく、つねに身をつつしんでいる聖者は、不死の境地におもむく。そこに至れば、憂えることがない」(中村

元訳)⁽⁴⁾。ヴェーダの文化は、行動と享樂の生活で始まり、

禁欲と克己の生活へと進展していった。しかし、出家修行者(沙門)の文化は当初から克己を起源としている。

模範的人間であり人類の父であるときみなされた有名な人物マヌによって記された『マヌ法典』では、善い生活を送るために完全な非暴力の原則を表明する多くの詩節を目にする。ある箇所では、次のように述べられている。「感官を制御し、愛憎を消滅させ、生き物に危害を加えないことによって不死にふさわしくなる」(渡瀬信之訳)⁽⁵⁾。

それ故、ヴェーダやウパニシャッドの文化であつても、我々の生活における不殺生の遵守を強調している。『マハーバーラタ』には次のようにある。「不殺生(ahimsā)は一切を備えた法である。また、殺生は善い法ではない」(中村了昭訳)⁽⁶⁾。

ペルシアの聖典である『アヴェスター』では、人間

に三種類の義務を課している。

(一) 敵を友人に転じる

(二) 邪悪な人を正しい人に変える

(三) 無知な人を聡明で博學な人に変える

敵を友人のように遇することは、全面的に不殺生の原則に基づいている。『旧約聖書』の中に見出されるのは、唯一神と隣人に対して人間が果たすべき義務の理想を表した十戒である。それによって、モーゼはイスラエル人たちを組織して一つの民族へとまとめ上げ、ユダヤ宗教の基本的な枠組みを生み出したのである。キリスト教徒は、キリストという模範とその教えとともに、十戒を彼らの道徳の基礎として受け入れている。第六戒は、「殺してはならない」(新共同訳)である。この掟では、同時に姦淫・盗み・色欲も禁じている。イエスは次のように言っている。

あなたがたも聞いているとおり、『目には目を、齒

には歯を」と命じられている。しかし、わたしは言っておく。悪人に手向かつてはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。あなたを訴えて下着を取ろうとする者には、上着をも取らせなさい。(マタイによる福音書五・三八～四〇。新共同訳)

イエスは続けて次のように述べている。

敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるうか。(同上五・四四～四六。新共同訳)

キリスト教的伝統では、愛は唯一神の同義語であり、我々が不殺生と呼ぶものの同義語である。非暴力の思

想は、様々な伝承文化において、実践形態を異にしている。或る者は極端に入念であり、他の者は中道を行う。しかし、どちらも日々の問題を解決し、平等・友愛・慈愛それに人格の高潔さを心がけている点は変わらない。非暴力に関するイスラームの見解は、人間の弱さを考え抜いている点で、他と異なる。『聖クルアーン(コーラン)』は次のように述べている。

我ら(アッラー自称)はイスラエルの子らにたいして明文の法規を定め、人を殺したとか、あるいは地上で何か悪事をなしたとかいう理由もないのに他人を殺害する者は、全人類を一度に殺したのと同等に見なされ、反対に誰か他人の生命を一つでも救った者はあたかも全人類を一度に救ったのと同等に見なされる、とした。(五・三五。井筒俊彦訳⁷⁾)

老子と孔子の教えは、生活における禁欲と克己を強調している。老子は、弟子たちに、暴力による傷を慈愛と同情によって癒やすことを勧めている。孔子は人々

に行動を自制するよう要請した。彼は語っている。

生命の小川に慈愛の奔流を生じさせ、友情のメツ
セージを伝えよ。

四、ガンジー（ガンディー）と不殺生

不殺生に関してガンジーが後世に遺したものは、世界に深い影響を生み出した。彼は、血を流すことなくインドの独立を達成するための効果的な武器として非暴力を用いたことで、非暴力の計り知れない力を我々に示したのである。彼はジャイナ教の学者ラーイチャンドバリーから深い影響を受けている。ガンジーは記している。「私にとって、真理の宗教以外の宗教はなく、不殺生以外の義務はない。不殺生は私にとって最も偉大な宗教である。私は、自分自身の経験の結果として、確信をもって語ることができるが、真理の完璧な描像は、不殺生を完全に実現した後には得られるのである」。

ガンジーは自らの生活の中で不殺生を生きていた。彼によれば、暴力は不平等によって育まれ、非暴力は

平等によって育まれる。私は彼の非暴力の思想を明確にするために再び彼自身の言葉を引こう。

生きている全てのものと一体化することは、自己浄化なしには不可能である。自己浄化なしには、不殺生の掟を守るとは空虚な夢にとどまるに違いない。しかし、自己浄化の道は困難で険しい。完全な清浄さを獲得するには、思考・発話・行動において絶対的に激情から自由でなければならぬ。愛と憎悪、愛着と嫌悪という対立する傾向性を乗り越えなければならない。

五、ジャイナ教における不殺生の原則

ジャイナ教は、インドの宗教伝統の中で最も古いものの一つである。それはまた、最も古い、非ヴェーダ的な思想学派でもある。「ジャイナ」という言葉は、征服者や勝利者を意味する「ジナ」に由来する。禁欲・懺悔・修行によって悪業を全て滅し、不殺生（非暴力）の誓戒を完全に守る人、すなわち、言葉・思考・行動

において襲ってくる、いかなる挑発や物理的危害にも反応することのない人は、アルハット（阿羅漢）となる。ジャイナ教徒とは、ジナたち、すなわち二十四人のティールタンカラを信奉する者である。最初のティールタンカラはリシャバ尊師であり、最後のティールタンカラはマハーヴィーラ尊師（紀元前五〇〇年）である。非暴力というジャイナ教の思想は、信徒たちに、思考・言葉・行動において暴力をほしきままにしてはならないと命じている。それは、あらゆる生き物が平等である」と信じており、平静な心があると信じている。不殺生は、平静な心の状態から生じる。ジャイナ教の伝統における不殺生は、あらゆる形態の生物に対する配慮と、思考・言葉・行いにおいて暴力を避けることを意味する。ジャイナ教の苦行者は、自ら完全に不殺生を実践する。彼は、他者が思考・言葉・行いにおいて暴力に訴えることを助長することはないし、彼自身が思考・言葉・行いにおいてそれを是認することもない。『アーチャーランガ・スートラ（アーヤーランガ・スッタ）』では、不殺生は以下の言葉で宣言されている。

私利によって喚起された有害な行動は、邪悪と暗黒に到る。これが、束縛・妄想・死・地獄と呼ばれているものである。他者に危害を加えることは、自らに危害を加えることである。「汝は、汝が殺さんとせる彼なり！ 汝は、汝が虐げんとせる彼なり！」。我々が他者を損なおうとするや否や、我々は自分自身を損なうのである。我々が他者を殺そうとするや否や、我々は自分自身を殺すのである。不殺生は、個人の内面的覚醒から萌え出づる。不殺生は同時に多くのことを伝える。一方、「非暴力」は単に物理的暴力をふるわないということを示すに過ぎない。

不殺生というジャイナ教の原則を正しい見方のもとで理解するためには、以下のようなジャイナ教の概念について明晰な理解を持つている必要がある。すなわち、ジークヴァ（靈魂・生命体）とアジークヴァ（非靈魂・非生命体）、アースラヴァ（流入）とバンダ（束縛）、サンヴァラ（制御。本能と衝動を防ぐこと）とニルジャラー（止滅。

本能と衝動を根絶すること）、そしてモークシャ（解脱。サンヴァラとニルジャラーから生じる解放）。有名な仏教の四諦、すなわち苦諦・集諦・滅諦・道諦においては、この世界には苦があり、苦の原因があり、苦に対する癒やしがあり、苦を終わらせ涅槃を達成する道があるということが認識されているが、それと全く同様に、ジャイナ教徒も以下のことを信じている。すなわち、世界は苦に満ちており、苦の原因は殺生（あらゆる形態の生物（ジーヴァ）を傷つけること）であり、殺生には、ジーヴァに対して実際に物理的に傷つけることだけではなく、不快で乱暴な言葉や思考で傷つけることも含まれている。思考・言葉・行いにおける殺生（暴力）の結果、業と成る物質の流入が起こり、現世および来世において、殺生にふけるジーヴァの悲惨と苦しみを増す。業と成る物質の流入は、業による束縛を生じ、ジーヴァが犯した罪悪と不法の性質に応じて異なった境遇にそのジーヴァを生まれさせる。この業による束縛を破壊するためには、ジーヴァは、自らの殺生を悔い改めなければならない。それは、ニルジャラーによって、す

なわち、禁欲し、懺悔し、完全な非暴力（不殺生）を実践し、心の平静さを守ることによってそうすることであり、それとともに、厳しく自らをいためつけることによってそうするのである。そうすれば、最後には、解脱（生と死の輪廻からの解放）を達成するのである。

マハーヴィーラ尊者は、ジーヴァ（地球上のあらゆる形態の生物）を六つの範疇に分類している。この地球上にいる生命体の、何よりも精緻で複雑な構造を認識していなければ、不殺生というジャイナ教の概念について論じることそのものが無意味である。マハーヴィーラによれば、全地球は生命体の集合以外の何ものでもない。彼のジーヴァ論は、六ジーヴァ説と呼ばれる（生物の六つの形態とは、地・水・火・風という四つの元素と植物・動物である）。他の哲学者たちは、地・水・火・風を生命体とは見なさないが、マハーヴィーラによれば、生命体なのである。マハーヴィーラ尊者と弟子のガウタマの間の対話を再現しておくのが有益であろう。

ガウタマ「衝撃を受けた時、地を身体とするジ

ヴァはどのような痛みを感じるのでしょうか」

マハーヴィーラ「ガウタマよ。若くて頑健な人が、老いて弱々しい人の頭を両手で殴ったと考えてみよう。若者に両手で頭を殴られて、この老人はどんな痛みを覚えるだろうか」

ガウタマ「尊師さま！ 老人は耐えがたいほどの痛みを感じるでしょう」

マハーヴィーラ「ガウタマよ。衝撃を受けた時、地を身体とするジーヴァは老人よりもはるかに大きい痛みを感じているのだ」

他の宗教伝統の中には、動物や人間に同情を示すよう信徒に命じているものがある。また、植物は命を有しており、樹木や草木は触れられたり打たれたりした時に痛みを感じると認めているものもある。しかし、地・水・火・風が生命体であると信じているものはないのである。

マハーヴィーラは、彼に従う苦行者たちに、地・火・水・風それぞれを身体とするジーヴァに対してさ

え、注意深く気を配り、危害を与えてはならないと勧告した。ジャイナ教の苦行者は、地球上の六種類の異なる形態の生物全てに対して暴力をふるわないことになっている。六ジーヴァ説というマハーヴィーラの原則は独特である。ある意味では、他を絶したものと呼ぶことさえできる。シッダセーナ尊師は、マハーヴィーラに関して次のように記している。

尊いお方よ！ 六ジーヴァ説という御教えだけで、あなたが全知であることを証明するのに十分でございませぬ。他の証拠など要りませぬ。

まことに、マハーヴィーラは、精神的完成に達し、自らの中に不殺生が目覚めたことによって、宇宙的なヴィジョンを得たのである。

マハーヴィーラの不殺生は、あらゆるものに行き渡り、地・水・火・風いずれを身体とするジーヴァであれ動物であれ、全てのジーヴァ（霊魂）に存在の正当性を認める。全てのジーヴァ（生物の形態）は平等である。

在家者が、生存のためには、完全に殺生をやめることは不可能だと感じるなら、彼は自分が殺生を行っているということに何一つ疑念を持つてはならないし、自分の生命を維持するために殺されているジーヴァに救いを乞わねばならない。

マハーヴィーラは、自制と寛容を命じる小誓戒（アヌヴラタ）を実践する帰依者に対しては、別の行動準則を作り上げた。苦行者のための五つの道は、五大誓戒（マハーヴラタ）から構成されている。それは、思考・言葉・行いにおける不殺生（非暴力）、真実を語ること、盗まないこと、梵行（思考・言葉・行いにおける純潔の実践）、無所有（アパリグラハ）の五つである。これは、いかなる形態であれ暴力を完全に放棄するという道である。苦行者の目標が解放（解脱）の獲得であるのに対して、ジャイナ教を信奉する在家者の目標は解脱の獲得に向けて向上していくことである。生態学的な環境の悪化は、この危機の源である人類の生存に対してだけでなく、巨大な困難に直面し絶滅の瀬戸際にある地球上の他の生物種に対しても、深刻な脅威を与えている。し

かし、科学者集団がジャイナ教の基本原則を研究し、不殺生に根ざしたジャイナ教的生活形態への転換を人々にうながしたなら、今この段階であっても、環境の悪化に歯止めをかけることは可能である。マハーヴィーラは弟子たちに次のように語っている。

過去のアルハット（尊い完全な靈魂）も、現在・未来のアルハットも、〴〵のような動物であれ、生き物であれ、有機体であれ、感覚を持つ存在であれ、傷つけたり、征服したり、隷属させたり、責めさいなんたり、殺したりしてはいけない」と、語り、説き、宣言し、断言した。不殺生の教えは無欠であり、不変であり、永遠である。

さらに次のように述べている。

暴力に訴え、暴力にふけり続ける者たちは、繰り返し輪廻（の悲惨）に苦しむのである。

このように、不殺生というジャイナ教の原則は、六
ジークア説（マハーヴィーラが分類した六種類の生物の形態）
という理論に基づいていると同時に、現在の生態学的
危機にとって最も適切な、比類無く精緻で深遠で現実
的な彼の非暴力の思想を明らかにしているのである。
ヨーロッパのある公聴会では、現在の生態学的危機は
以下のように描写されている。

重要な問題は以下の点である。破局的な規模に近
づきつつある、多くの地域での環境悪化。人口の
大多数にとつての貧困に更なるしかかる窮乏。社
会の分解を促進する極端な社会的差別。多くの人々
に方向を見失わせる、価値体系の喪失。安全の保
障がない、犯罪の増加。国土の潜在労働力の消失。

マハーヴィーラは不殺生の思想に新しい次元を加え
た。それは、アネーカーンタヴァーダ（多面的見解。真
理は多面的であるという教説）と呼ばれている。前在英イ
ンド高等弁務官であるL・M・シンヴィーは、有名な

著書『自然に関するジャイナ教徒の宣言』の中で、多
面的見解を説明して、次のように述べている。

普遍的相互依存という思想は、多面的見解すな
わち真理が多面的であるという教説として知られ
るジャイナ教の知識論を補強している。多面的見
解は、世界を次のようなものとして描き出す。現
実は多面的で絶えず変化しており、観察者と観察
されているものの時間・場所・性質・状態に依拠
した無限の視点がある、と。

これは、真理は異なる見解（ナヤ）に応じて相
対的である」と主張するスヤードヴァーダ⁽⁸⁾すなわ
ち相対性の教説へと導く。或る観点から見れば正し
いものは、別の観点からの質問に対して開かれて
いる。何であれ特定の視点からだけでは全体的真
理は把握されない。何故なら、絶対的真理とは、
この世界全体を作り上げている多様な視点全ての
総和だからである。ジャイナ教は多面的見解とス
ヤードヴァーダという教説に根ざしているので、

この世界全体を人間中心の視点から見ることもないし、自民族中心の視点から見ることもないし、自己中心的な視点から見ることもない。それは、他の生物種、他の共同体や国家、他の人間の視点を考慮に入れるのである。

不殺生は、ジャイナ教の基本原則であり、それが意味するものの全ての精髓である。我々が生きている時代は、科学と理性の時代である。それはまた民主主義の時代でもあり、民主主義に最高の重要性を付与している。しかし、大半の宗教的伝統は神を最高の支配者と見なしており、神が望むことがなければ宇宙の万物は動かないと考えている。こうした信仰とは反対に、ジャイナ教では、神を、あらゆる形態の情欲から自由となった完全に解脱した靈魂と考えている。彼は宇宙を支配してはいないが、全てのジーヴァ（靈魂）を平等と見なしており、それぞれに対して神の状態を獲得する権利を授けている。言葉を換えれば、全てのジーヴァは、浄化の道を歩み、心の平静さを体得したならば、

神になることができるのである。彼らの向上は、自らの行いによって決定されるのであり、神の特別な憐れみによってではない。独裁は、ジャイナ教の辞書の中には見出されない言葉である。どのティールタンカラ（ジャイナ教の伝承の中で最高の精神的権威）も、任意のジーヴァを、天国に送ることも地獄に送ることもできない。しかし、彼らが示した道によって、解脱すなわち解放を獲得できることは確実である。私が言いたいのは、平等と真の民主主義はジャイナ教の支柱であるということである。

六、不殺生とエコロジ

これまでで既に述べたとおり、不殺生それ自体がエコロジ的な倫理である。全ての生き物は生きること欲しているが故に、殺すことは非倫理的で罪深いとひとたび実感すれば、そうなるはずである。不殺生は最も偉大な宗教である。それは人々に生きることを命じ、生かすことを命じる。ジャイナ教の不殺生思想では、心理的形態の暴力や言語的形態の暴力は、物理的

暴力の諸形態よりも危険である。殺すとか他者に危害を加えるとか他者を倒そうと謀るといった考えは、最初に人間の心の中で生まれる。人間の心の中にこうした性向がある主たる理由は、四つの主要な情欲が生じるからである。それは、執着、憎悪、高慢、欺瞞である。結果的に、人間は自らの同朋である人間に対して非倫理的に振舞うだけでなく、人間以外のもの（環境）に対しても非倫理的に振舞う。現代のエコロジー哲学者であるアルネ・ネス教授は、正當にも、生態学的危機は、人間以外のものに対する人間の無制限の暴力的態度から発している」と述べている。生態学的な調和のためには、人間と人間以外のものが共に繁栄することが必要である。それは、人間が日々の生活で不殺生を遵守した時にのみ、可能となる。完全に暴力を断つことは、在家者には不可能である。それ故、マハーヴィーラ尊者は、彼は少なくとも不必要な暴力は断たなくてはならない」と述べている。不可欠な暴力は人間の生存に結び付いており、不必要な暴力とは、慰藉や美的装飾のため、また食欲を満たすためにふるうものである。

人類が、不必要な暴力にふけることをやめ、環境に加える危害を最小にする」というこの誓いを立てるなら、持続可能な生態学的調和がもたらされるだろう。

（参考文献）

1. *Jainism: An Indian Religion of Salvation* by Glasenapp, published by Motilal Banarsidas, New Delhi, India.
2. *Tatva Sutra* by Umasvati (English) edited by Dr. Nathmal Tatia, published by Harper and Collins, UK.
3. *Jain Darshan, Manan aur Mumansa* by Acharya Mahapragya, published by Jain Vishva Bharati, Ladnun, India.
4. *Jaina Philosophy and Religion* by Muni Shri Nyayvijayaji, published by Motilal Banarsidas, New Delhi, India.
5. *Illuminator of Jainism* by Acarya Tulsi, English rendering by Prof. Sankari Mukherjee, published by Jain Vishva Bharati, Ladnun, India.
6. *Introduction to Jainism* by Rudi Jansma and Sneh Rani Jain, published by Prakrit Bharati Academy, Jaipur, India.
7. *The Rambling of an Ascetic* by Acharya Mahapragya, published by Books Today, New Delhi, India.
8. *Ahimsa Tatva Darshan* by Acharya Mahapragya, published by Adarsh Sahitya Sangh, New Delhi, India.
9. *Acharang Bhashyam*, Commentator Acharya Mahapragya Synod Chief Acharya Tulsi, published by Jain Vishva Bharati, Ladnun, India.

ti, Ladnun, India.

10. *Jainism and Ecology* by Christopher Key Chapple, published by Motilal and Banarsidas, New Delhi, India.

11. *Jiva-Ajiva* by Acharya Mahapragya, published by Jain Vishva Bharati, Ladnun, India.

12. *The Ecology of Wisdom* by Prof. Arne Naess, Amazon.com.

13. *Jain Siddhant Kosh* by Jinedra Varni, published by Bharatiya Gyan Peetha, New Delhi, India.

注

- (1) (訳注) フリッチョフ・カブラ (吉福伸逸他訳)『ターニング・ポイント』(一九八四年(原著一九八二年)、東京・工作舎) 五八頁。
- (2) (訳注) 原文は“two millions” (二百万) だが、広島・長崎での死者数により訂正。
- (3) (原注) *Jainism: An Indian Religion of Salvation* by Glase-napp, published by Motilal Banarsidas, New Delhi, India. (グラゼナップ『ジャイナ教——インドの救済宗教』)。
- (4) (訳注) *Dhammapada* 225. 中村元訳『ブッダの〈真理のことは 感興のことは〉』(一九七八年、岩波書店) 四一〜四二頁。
- (5) (訳注) *Mamsuti* 6:60. 渡瀬信之訳『サンスクリット原典全訳』マヌ法典』(一九九一年、中央公論社) 一

九四頁。

- (6) (訳注) マハーバーラタ (プーナ版) 12.273.20. 中村了昭『マハーバーラタの哲学(上)』(一九九八年、京都・平楽寺書店) 四六五頁。

- (7) (訳注) 井筒俊彦訳『コーラン(上)』(一九六四年改訂版、岩波書店) 一五一頁。「五・三五」という節番号はフリーゲル版によるもので、カイロ版では五・三二。『日垂対訳聖クルアーン』(日本ムスリム協会)では、こちらの節番号を採用している。

- (8) (訳注)「ある点からいえば (sy) 、……である」という、真理の多面性・相対性をふまえた、ジャイナ教徒の論法のこと。

※ 翻訳にあたり、渡辺研二『ジャイナ教』(二〇〇五年、東京・論創社) を参照しました。記して感謝申し上げます。

(Sonal Lal Gandhi / 世界平和非暴力センター
[ANUVIBHA] 名誉会長)
(訳・まえがわ けんいち / 東洋哲学研究所研究員)